



Data

監督：三池崇史
原作：高橋のぼる『土竜の唄』（小学館『週刊ビッグコミックスピリッツ』連載中）
脚本：宮藤官九郎
出演：生田斗真／瑛太／本田翼／古田新太／菜々緒／上地雄輔
／仲里依紗／堤真一／吹越満／遠藤憲一／皆川猿時／岩城滉一／久松郁実

■■■ショートコメント■■■

◆小池百合子東京都知事の「頭の黒いねずみ」発言を巡って、「それは一体ナニ（誰）を指すの？」という面白い「論争」を呼んだ。他方、本作を観て私は「土竜」と書いて「もぐら」と読むことをはじめて知ったが、本作の言う土竜（もぐら）とは一体ナニ（誰）？それは、潜入捜査官のことだ。

生田斗真を潜入捜査官・菊川玲二役として、主演させた三池崇史監督の『土竜の唄 潜入捜査官 REIJI』（14年）が大ヒットしたため、2年ぶりにその続編たる本作が作られ、「ひょっとしてパート3も・・・？」「シリーズ化も・・・？」と噂されているらしい。「潜入捜査官もの」と言えば、香港映画の『インファナル・アフェア』3部作（02年、03年、03年）と、それをハリウッドがリメイクした『ディパーテッド』（06年）（『シネマールーム14』57頁参照）が有名で、面白い力作だった。

それに比べれば、前作も本作もその原作は高橋のぼるの人気コミック『土竜の唄』を映画化したものだから、そもそも私は観る気がしなかったが、上映時間の関係でたまたま本作を鑑賞することに・・・。

◆私は、超個性派である三池崇史監督も、脚本家としてのクドカンこと宮藤官九郎も嫌いではなくむしろ好きだが、同じような傾向の映画が次々と登場してくるため、次第に観る気を失っていた。本作も冒頭に登場するバカバカしいシーンを見ていると、ああやっぱり・・・。

もっとも「潜入捜査官もの」は、どれほど怖いヤクザ組織や組長が登場するかが最大のポイント。しかして、本作導入部で次々と紹介される、①潜入捜査官とは知らずに菊川玲二（生田斗真）を「兄弟分」と信頼するクレイジー・バピヨンこと日浦組組長・日浦匡也（堤真一）、②数寄矢会会長・轟周宝（岩城滉一）、③数寄矢会を破門になった暴走モモンガこと鼯鼠一家組長・桜罵百治古田新太）等の個性豊かなヤクザの面々を見ていると、それなりの興味が湧いてくるから、三池監督の演出力はさすが・・・？

◆平成3年5月に制定された暴対法の「使用者責任」条項が適用され始めると、ヤクザも出来の悪い末端組織や組員をトカゲのしっぽ切りのように見捨てる風潮が強まったらしい。本作に見るその典型が中国マフィアの仙骨竜と結託して、人身売買に手を染めている暴走モモンガこと桜罵百治だ。

そこで、日浦は周宝から数寄矢会の直参として、日浦組の看板をもらったことの見返りとして、百治つぶしを命じられることに……。周宝は、同時に玲二を周宝の護衛役として周宝の家に住みこむように命じたが、それは日浦と玲二を分断させるためらしいから、ひょっとして玲二には潜入捜査官の疑いが持たれているの……？

◆他方、本作中盤以降に警察側のエースとして登場してくる警視庁組織犯罪対策部の兜真矢（瑛太）の姿を見ていると、その姿カタチのカッコ良さだけではなく、その清廉潔白ぶりでも最高の清涼剤……？

誰でもそう思うと思いますが、ひょっとして正義を声高にふりかざし清廉潔白を売りにする男ほど頭の黒いネズミかも……。？皮肉っぽくそんな風に見ていると、アレレ、アレレ案の定本作後半からの展開は……？

◆私が中・高校生の頃よく観た日活の青春映画の中で、吉永小百合より若い世代ながら演技派として輝いていた女優が和泉雅子。清純な役をやらせれば吉永小百合以上に輝いていたが、『非行少女』（63年）に代表されるひねくれ役をやらせればその演技力は抜群だった。しかし、本作で周宝の一人娘・轟迦蓮役を演じる本田翼は、佐藤浩市と共演した『起終点駅 ターミナル』（15年）ではおいしい「ザンギ」を食べさせてもらうおいしい役(?)を好演していたが（『シネマルーム37』48頁参照）、本作では「奇跡の処女」ながらいかにもヤクザの娘らしい見事なハジケっぷりを見せるのでそれに注目！

他方、本作ラストのクライマックスの舞台は香港に移るが、そこでは日本でも一対一で周宝をあわや死亡寸前まで追い詰め、香港でも仙骨竜のヒットガールとして大活躍する胡蜂（フーフォン）（菜々緒）（のとりわけその美脚ぶり）に注目！迦蓮と胡蜂の2人に比べると、第1作では、玲二の恋人として大活躍したらしい爆撃の若木純奈（仲里依紗）の存在感は薄くなっている。香港の超高級美女の人身売買に被害者の中国人として登場するチャーリン（久松郁実）を含め、本作では4人の美女たちの対比も楽しみたい。

2016（平成28）年12月28日記